

黒澤明が人間を諦めた理由は、今の私には何となく分かる。「人間とはこれしきのものか」。私も70歳。立派な老人である。

人間を諦めた老人は説教好きになる。懐古趣味の説教である。だれも入場料まで払って、映画や演劇から説教はされたくない。わが家にも、私の説教を嫌って若い連中が集まらなくなつた。今は長男大吾のアパートに集まって、私を攻略する策略を練っているらしい。それでいい。

やってみる。

私の処女作は「トンテントン」である。東京の下宿の炬燵で書いた。20歳であった。もう、すでに望郷の念があった。少年時代、星鹿では老人からよく素行の悪さを説教された。そして、

画の「卒業」も嫁盗みがテーマであったから、どこにでもある話かもしれない。

黒澤明の映画から説教を感じ始めたのは「赤ひげ」以降である。私も人間を諦めかけているのかもしれない。隠居を考えたらしをした人を知っている。今は横浜でアパート暮らしである。テレビ番組の「人生の楽園」では、隣近所の人がおかずや野菜を持って来たり、集まっては酒を飲んだりしているが、あれは稀なケースといつていい。「や

故郷見つめ考える

かんころ餅を振る舞われ「嫁盗み」の自慢話を聞かされた。老人の仲間が好きだった娘が隣村へ嫁ぐ夜、仲間たちは禰なまいっちようで海から花嫁衣装の娘を盗む。そして、夜の浜辺で三々九度の杯をするのである。実際、そうして夫婦になり幸せな一生を過ごした人もいるらしい。洋

りもする。「田舎で百姓でも」。でも、「でも」で百姓ができるほど田舎暮らしは甘くはない。東京の家を売り払って、田舎暮らしは3日で飽きて、すぐに東京

を恋しがるとも思えない。こんな話を知っている。都会に働きに出た娘が小遣いを貯めて、お盆休みに故郷へ帰る。隣近所の人はいくく帰って来たね」と歓迎する。そして、「いつまでもおるとね」と聞くのである。娘は都会に帰りたくなかった。お盆が過ぎて、まだ実家にいる娘に隣近所の人はいくく帰って来たね」と屈託なく言う。その夜、娘は故郷を離れた。そして、再び故郷に戻るとはなかった。どっちが悪いと



おかべ・こうたけ 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

(松浦市出身)